

# 日本記者クラブ会報

第424号  
2005年  
(平成17年)  
6月10日発行

〒100-0001  
東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一  
日本プレスセンタービル  
◎社団法人 日本記者クラブ

## 新理事長に滝鼻卓雄(読売)氏

### 「ニュースは内幸町から」を標榜

5月16日に総会が開かれ第17期の理事・監事(3ページ)が決まりました。この総会で、北村正任氏(毎日新聞・社長)が任期満了で退任し、後任理事長には滝鼻卓雄氏(読売新聞東京本社社長・編集主幹)が就任しました。

滝鼻新理事長は1963年に読売新聞に入社、社会部長、総務局長兼



人事部長、常務取締役社長室長、専務取締役総務・広報担当などを経て、昨年1月から現職です。クラブではこれまで会員資格委員長を務めていました。

新役員による初の理事会が総会を一時中断して開催され、滝鼻さんは満場一致で第14代の理事長に互選されました。副理事長、専務理事、各委員会の委員長も次のように決定しました。

- 副理事長 君和田正夫 (再任・朝日)
- 専務理事 岩崎玄道 (再任)
- 総務委員長 橋本達明 (新任・毎日)
- 資格委員長 喜多恒雄 (新任・日経)
- 企画委員長 宇治敏彦

- (再任・中日) 会報委員長 住田良能(再任・産経)
- 施設委員長 石村英二郎(新任・NHK)

再開された総会で、滝鼻理事長は挨拶し、「ニュースは内幸町から」を合い言葉に、強力な執行部とともに会員の協力を得て取り組みたいと抱負を語りました。

写真(産経提供)は同日夕刻の会員懇親会で、黒田勝弘さん(産経)のクラブ賞受賞に祝辞を述べる滝鼻理事長。このパーティーの席でも「もっとニュースに執着しようよ」と事務局長を叱咤し、社会部出身らしく率直に「雅子さんと呼んだらどうだろうね」と会員とも話していました。

昨年度はジャパン・パッシングの影響もあって、大物会見が減少しました。充実した研究会でなんとか埋め合わせた格好になっています。9月までにはホームページを立ちあげ、すべてとはいきませんが、こうした研究会や歴史的な会見のデータ

ベース化をはかります。持ち場を離れられない一線記者や地方会員の参考になればと考えています。それはそれとして、やはりクラブとしてはもっとニュースにこだわるのが本筋だと思います。「公式会見」の定着、重視ということも、このクラブの使命のように思います。

容易なことではないのは承知ですが、歩を踏み出さなければなりません。現に先月、絶好のタイミングで行われた、武部自民幹事長の会見(5・25)でも、現役記者の質問はゼロでした。郵政民営化法案の国会審議入り前日で、日中での靖国問題があつた状態の時です。平河クラブの記者も多数出席し、10台を超すテレビカメラが入っていました。

最初に立った細島泉会員(元毎日編集局長)の質問は、味のある表現で小泉首相の靖国参拝の核心を、幹事長にただすものでした。しかし、中には何が質問なのかも分からないものもありました。オープンな会見はつねに玉石混濁ですが、やはり玉が多くなくては困ります。運営上での工夫の余地もあります。記者会見に出席する限りは、現役でもOBでも、もっとニュースを引き出すことに集中してもらいたいものです。(岩崎玄道)

いまほどジャーナリズムが大切だと期待されている時代はないと思います。日々揺れ動く「ニュースの海」の中で、ジャーナリスト一人一人の活動。その存在感の重みをひしひしと感じる毎日は私は過ごしています。

ちようどその時、日本記者クラブの理事長に就任しました。

クラブの運営方針につきまして北村前理事長の方針通り実行するだけです。特別の変更はありません。特に今回の執行部は、各委員会委員長をはじめとする方々が強力メンバ

杉田前理事長の任期を途中で受け継いでからの2年余を、無事過ごすことができて、ホッとしています。「無事」で満足するとはなにごとか、とのおしかりがあるかもしれませんが。

「情報発信基地としての機能を高めるために、各社の現役がどんどん出入りするクラブでありたい。東京から離れた場所にいる会員にとって、もっと利用価値のあるクラブでありたい」——私は就任時にそのように申しました。

企画委員会をはじめ多くの会員の

ーでありますので、何の心配もしていません。

今後ともわが国の情報発信のセンター的な機能を果たし、さらにその

## ニュースの争奪戦を

▼滝鼻 卓雄

機能を一層高めていきたいと考えております。そのために各種の記者会見、研究会、パーティーがニュース発信の基地として有効に活用される

ことを願っています。

本来日本記者クラブは、単なる会員相互の懇親の場所だけではなく、世界のメディアに影響力のある

ニュース発信基地であってほしいと願っています。ニュース発信機能を充実させることが、私の任務と心得ています。

すべての会員の皆さまと力を合わせて、「内幸町発のニュース」を實行したいと決意しています。ジャーナリストたちは「ニュース

の海」で自由に泳ぎまわっています。彼ら彼女らの牙は鋭いだけでなく、その手口にはあくまで貪欲です。日本記者クラブはその欲望にこたえる義務があると考えます。「ニュースの修羅場」と言えば過激に聞こえるかもしれませんが。しかし、毎回の記者会見がニュースの争奪戦にならないければ、とひそかに願っています。  
(読売新聞東京本社代表取締役社長・編集主幹)

## プロの力量と責任

▼北村 正任

ご努力で、昨年度だけで70回もの記者会見、42回もの充実した研究会・懇談会が実施されました。しかし、それが直接新聞、放送のニュース源になる割合は、相変わらず低いといわざるを得ません。この点での私自身の取り組みが不足だったと反省しています。

それにしても2年間にわたり、役員、会員、事務局の皆さんには大変お世話になりました。一致してクラブの活動に貢献している方々には、このクラブこそが日本のジャーナリズムの本拠地だという共通認識がある——そのことを痛感しています。

要だという、誤った意見があります。デマもあり野次もあり、故意の情報操作もエロもグロも、なんでもありの「情報」社会だからこそ、真実を見極め、正確に伝えるプロの力を持ったジャーナリズムの存在意義は高まっています。  
滝鼻新理事長のもと、この根拠地がますます強固なものになるよう、私もお役に立ちたいと思っています。  
(毎日新聞社代表取締役社長)

# 第66回 通常総会

5月16日(月)  
クラブ宴会場

日本記者クラブの第66回総会(2005年度通常総会)は、出席法人会員31社、委任法人会員101社、計132社の出席をもって成立(定足数74社)、定款23条により、北村正任理事長が議長になり開催された。

2004年度事業報告(前号既報)、同収支決算ならびに繰越収支差額処分(4ページ参照)を

## 第17期役員

(2005.5~2007.5)

\*役職は5月16日現在

### ◇理事長(新)

滝鼻 卓雄 読売新聞社東京本社代表取締役社長・編集主幹

### ◇副理事長(再)

君和田正夫 朝日新聞社代表取締役専務・編集担当

### ◇専務理事(再)

岩崎 玄道 事務局長

### ◇理事・総務委員長(新)

橋本 達明 毎日新聞社専務取締役、主筆

### ◇理事・会員資格委員長(新)

喜多 恒雄 日本経済新聞社専務取締役社長室長、広報・法務・グループ戦略担当

### ◇理事・企画委員長(再)

宇治 敏彦 中日新聞社常務取締役・東京本社代表兼論説担当

理事会案どおり承認した。

続いて第17期役員を選任に移り、役員選出委員会の原案通り理事29人、監事3人を決定した。

この後、総会は一時休憩となり、新役員による理事会が別室で行われ、理事長に滝鼻卓雄氏(読売新聞)、副理事長に君和田正夫氏(朝日新聞)を互選。専務理事に岩崎玄道事務局長を再任した。さらに総務、会員資格、企画、会報、施設運営の各委員会委員長を別記のように決めた。

退任した北村前理事長は、再開された総会で次のようにあいさつした。「皆さんのご協力が無事大任を果たすことができ感謝したい。日本記者ク

### ◇理事・会報委員長(再)

住田 良能 産経新聞社代表取締役社長

### ◇理事・施設運営委員長(新)

石村英二郎 日本放送協会理事・放送総局副総局長

### ◇理事

国分 俊英 共同通信社常務理事・編集総本部長

三橋 清二 時事通信社取締役労務・マスメディア担当

杉江 良之 北海道新聞社東京支社長

野中 大蔵 西日本新聞社東京支社長

竹内 希六 新潟日報社取締役編集局長

大前 吉文 中国新聞社東京支社長

秋山 勇雄 静岡新聞社東京支社長

妹尾 務 徳島新聞社東京支社長

花田 昴 福島民報社代表取締役社長

小松崎和夫 報知新聞社代表取締役社長

金平 茂紀 東京放送報道局長

クラブが地方会員社にとっても存在意義のある、また現役記者がもっと集まりニュースの発信基地としての機能を高め、ジャーナリズムのメッカとしての位置づけになることを期待したい。

なお新理事会は、慣例に従い、北村氏に記念品を贈ることを決めた。

総会の席上、本年度の日本記者クラブ賞の表彰式も行われ、黒田勝弘産経新聞ソウル支局長・論説委員に賞状と副賞としてプラチナ製の記念メダルが贈呈された。

島田 洋一 日本テレビ放送網取締役執行役員報道局長兼解説委員長兼報道審査委員長

大戸 宏 フジテレビジョン常務取締役

中井 靖治 テレビ朝日常務取締役報道局長

藤井 実 テレビ東京常務取締役経営戦略局、メディア開発局担当

森岡 啓人 読売テレビ放送執行役員報道局長

佐藤 重喜 文化放送代表取締役社長

高木 正春 大分放送東京支社長

村上 重美 日本新聞協会専務理事

玉川 寿夫 日本民間放送連盟専務理事

佐藤 嘉男 日本プレスセンター専務取締役

### ◇監事

確井 洋 岐阜新聞社東京支社長

野方 正治 熊本日日新聞社取締役東京支社長

笹原 嘉弘 札幌テレビ放送専務取締役編成局長

## 2004年度収支計算書

自 2004年4月1日  
至 2005年3月31日

科 目	予算額	決算額
<b>支出の部</b>		
1. 事業費	( 244,060,000)	( 238,736,296)
借室維持費	( 182,686,000)	( 182,521,881)
借室料	106,781,000	106,780,464
共益費	16,640,000	16,639,944
空調・光熱・水	9,265,000	9,101,473
ホール専用利用費	50,000,000	50,000,000
会議費	4,540,000	2,951,195
事業運営費	28,672,000	27,721,867
会報発行費	17,800,000	17,408,110
運営雑費	1,542,000	797,633
通信費	4,000,000	4,187,692
印刷費	3,560,000	2,946,038
交通費	1,260,000	201,880
2. 管理費	( 167,304,000)	( 163,552,337)
(1)人件費	( 135,132,000)	( 135,243,913)
給与	78,348,000	82,120,684
賞与・諸手当	54,784,000	51,901,040
厚生費	2,000,000	1,222,189
(2)その他の管理費	( 32,172,000)	( 28,308,424)
クラブ管理費	23,124,000	21,221,311
機器備品費	1,500,000	505,476
消耗品費	3,200,000	3,058,236
事務委託費	3,436,000	2,857,119
事務雑費	912,000	666,282
3. 諸引当金への支出	( 60,000,000)	( 60,000,000)
(1)退職準備積立預金	40,000,000	40,000,000
(2)資産準備積立預金	10,000,000	10,000,000
(3)クラブ賞積立預金	10,000,000	10,000,000
4. 予備費	( 30,608,000)	( 0)
【一般会計支出計】	( 501,972,000)	( 462,288,633)
5. 特定積立預金への支出	( 112,000)	( 941,135)
(1)増加賃料積立預金	64,000	132,117
(2)特別積立預金	17,000	723,103
(3)クラブ賞積立預金	31,000	85,915
6. 諸積立金からの支出	( 5,000,000)	( 4,767,444)
(1)クラブ賞積立預金	0	514,500
(2)特別積立預金	5,000,000	4,252,944
【特別会計支出計】	( 5,112,000)	( 5,708,579)
当期支出合計(C)	507,084,000	467,997,212
当期収支差額(A)-(C)	-40,000,000	-4,628,570
次期繰越収支差額(B)-(C)	32,505,479	67,876,809

科 目	予算額	決算額
<b>収入の部</b>		
1. 会費収入	( 385,504,000)	( 382,117,000)
(1)プレス会員会費	( 323,372,000)	( 321,133,200)
法人会員会費	216,403,000	216,314,800
個人A会員会費	28,123,000	27,184,400
個人B会員会費	2,418,000	2,414,900
個人C会員会費	12,974,000	10,965,000
個人D会員会費	63,454,000	64,254,100
(2)賛助会員会費	( 62,132,000)	( 60,983,800)
法人賛助会員会費	50,718,000	50,022,500
個人賛助会員会費	5,174,000	4,584,800
特別賛助会員会費	6,240,000	6,376,500
2. 事業収入	( 75,876,000)	( 74,410,513)
(1)貸室収入	44,669,000	44,213,786
(2)飲食売上割戻し収入	25,491,000	23,667,302
(3)施設機器賃貸収入	5,716,000	6,529,425
3. 雑収入	( 592,000)	( 1,132,450)
(1)預金受取利息 (普通預金、退職、資産準備)	235,000	603,930
(2)雑収入	357,000	528,520
【一般会計収入計】	( 461,972,000)	( 457,659,963)
4. 特定預金受取利息	( 112,000)	( 241,135)
(1)増加賃料積立預金	64,000	132,117
(2)特別積立預金	17,000	23,103
(3)クラブ賞積立預金	31,000	85,915
5. 入会金	( 0)	( 700,000)
6. 特定預金取崩収入	( 5,000,000)	( 4,767,444)
(1)クラブ賞積立預金	0	514,500
(2)特別積立預金	5,000,000	4,252,944
【特別会計収入計】	( 5,112,000)	( 5,708,579)
当期収入合計(A)	467,084,000	463,368,542
前期繰越収支差額	72,505,479	72,505,479
収入合計(B)	539,589,479	535,874,021

## 次期繰り越し収支差額処分

2004年度決算の結果生じた次期繰り越し収支差額67,876,809円のうち、2,000万円を退職準備積立預金に、2,000万円を資産準備積立預金にそれぞれ積み増し、27,876,809円を次期に繰り越す。

貸借対照表

2005年3月31日現在

科 目	金 額	
<b>I. 資産の部</b>		
1. 流動資産		
現金・預金	53,551,964	
未収入金	8,781,281	
立替金	8,895,023	
前払金	11,879,261	
仮払金	570,132	
流動資産合計		83,677,661
2. 固定資産		
内装設備	16,082,618	
什器備品	4,971,415	
敷金	32,271,109	
保証金	55,342,000	
退職準備積立預金	219,233,682	
資産準備積立預金	244,168,415	
増加賃料積立預金	120,904,384	
特別積立預金	68,725,383	
クラブ賞積立預金	88,345,421	
固定資産合計		850,044,427
資産合計		<u>933,722,088</u>
<b>II. 負債の部</b>		
1. 流動負債		
仮受金	2,258,400	
預り金	0	
未払金	13,542,452	
流動負債合計		15,800,852
2. 固定負債		
退職準備積立金	219,233,682	
資産準備積立金	244,168,415	
増加賃料積立金	120,904,384	
特別積立金	68,725,383	
クラブ賞積立金	88,345,421	
固定負債合計		741,377,285
負債合計		<u>757,178,137</u>
<b>III. 正味財産の部</b>		
正味財産		176,543,951
(うち当期正味財産増減額)		(-7,429,642)
負債及び正味財産合計		<u>933,722,088</u>

△法人会員代表変更▽

徳島新聞社  
 (新) 松村 寛 理事社長  
 (旧) 坂田 雄幸  
 日経映像  
 (新) 鈴木 民三 代表取締役社長  
 (旧) 池田 正義

■会議報告■  
 第333回会員資格委員会

(5・12 小会議室)  
 6月1日付の会員入退会を審議し、理事会に答申した。  
 出席 伝川、帆江、金子、伊藤、山本、今田の各委員。  
 第262回会報委員会  
 (5・16 小会議室)  
 5月号について意見交換した後、6月号の編集について協議した。

出席 住田委員長、橋場、永井、中園、福沢、布施、仙石の各委員。  
 第409回理事会  
 (5・16 大会議室)

①第17期の理事長、副理事長、専務理事を互選。総務、会員資格、企画、会報、施設運営の各委員会委員長を決定した。  
 ②北村前理事長に対し、慣例に従い記念品を贈ることを決定した。

第343回企画委員会

(5・17 宴会場)

新委員の三好晴海日本民間放送連盟番組部長(旧・中谷洋一氏)を委員長が紹介したあと、8月18、19両日に開催予定の「記者研修会」のテーマやゲスト候補について協議した。また、新しくスタートさせるシリーズ研究会「憲法問題」(仮題)について意見を交換したほか、今後のゲスト候補なども協議した。

出席 宇治委員長、村松、帆江、山田、橋本、岡田(直)、矢島、春名、稲田、菅沼、影山、川戸、齊藤、井田、和田、岡田(晃)、鳥居、三好、長沢の各委員。

△寄贈書▽

日本警察官僚総合年鑑

小山善一郎会員

△招待券▽

朝日新聞社から「世界報道写真展2005」を、寄贈いただきました。

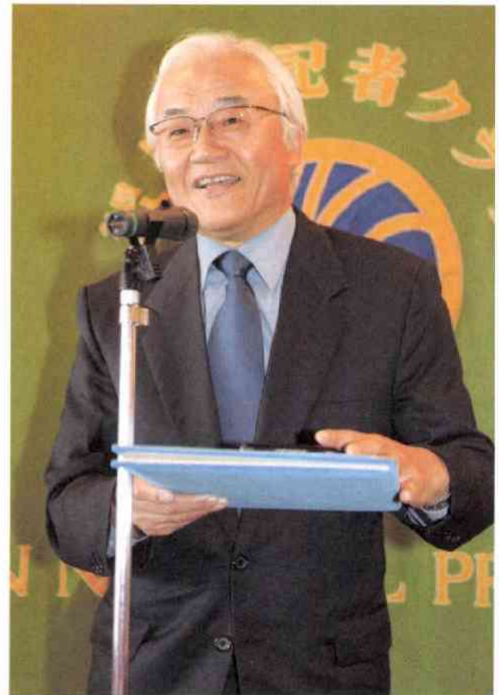
### 2005年度 日本記者クラブ賞

今回の受賞はほんとうにうれしい。それにはいくつかの理由がある。ひとつはこのところソウルでのほくの記者活動にいろいろ難しいことが起きていて、この受賞が大きな支えになってくれるのではないかと期待しているからだ。

近年の韓国事情でいえば、紙面でもしばしば伝えてきたように、韓国社会は民主化のひとつの結果として北朝鮮に対しすこぶる融和的になっている。今や北朝鮮批判に対しては政治的、社会的圧力さえかかるという時代なのだ。

これとどこかでつながっているのかもしれないが、反日ナショナリズムもまた局面によっては昔よりも強くなっている。そのため日本がらみでは「異論は許さない」という社会的雰囲気強い。この親北・反日ムードはとくにインターネット世界で顕著に見られ、それを既存の新聞やテレビそして政治世界が「世論」として重宝がる。

その結果、北朝鮮の現状に厳しく、日本については新しい歴史教科書作りを支援するなど、日本の「保守化」



右傾化を主導している」と見られている産経新聞やほくへの風当たりが非常に強い。韓国の一部メディアや左派・反日団体などは産経新聞ソウル支局の閉鎖やほくの国外追放さえ主張している。

ごく一例だがこんなこともある。「日本との過去についてはもう触れない」と何回も公言していた大統領が「三・一節記念演説」で突然、日本に対しあらためて謝罪と反省と賠償を求めると発言した。

その翌日、外相会見でほくは「国家的には謝罪はもう終わっているはず。政権交代のたびに謝罪要求とは正常な外交だろう

## まだまだ負けへんよ

黒田 勝弘 (産経新聞ソウル支局長員 兼 論説委員)

か。次はどんなかたちの謝罪が必要なのか」と質問したのだが、この質問を「不遜な妄言」とする韓国メディアによって名指しで袋たたきにされてしまった。

ほかにいろいろなことがあるが、とにかく最近、韓国における産経新聞およびほくに対するパッシングは激しい。偶然(?)とはいえ、そんな中で受賞だけに、ほくにあっては実にうれしく、ありがたい。

さらにボーン上田記念国際記者賞(1992年度)の時にも感じたのだが、朝鮮半島一筋でやってきたから(韓)行きさんの長年の活動に対する評価としてうれしい。これはソウル駐在を限りなく認めてくれる産経新聞のおかげでも

ある。

前述のパッシングを含め、韓国朝鮮半島は日本人記者には実に面白い。緊張がらみでぜんぜん飽きない。やりがいも尽きない。

もうひとつのうれしさはトシのことだ。60歳を超した現役記者としての評価もしてもらったと思っっている。今ソウルの内外記者の中では現場記者としてはほくが最年長だろう。年の功というのか、あるいは儒教社会の伝統だろうか、それなりにいつも一目おかれることの快感も楽しい。

昨年、ソウルで白内障を手術し目もよく見えるようになった。尿酸値は節制で落とした。長年の単身赴任だが韓国食と韓国各地を巡っての釣りで健康も万全だ。

「まだまだ負けへんよ」。重ねて受賞に感謝します。

くろだ・かつひろ 1941年生まれ。大阪市出身。京都大学経済学部卒。64年共同通信入社。80-84年ソウル支局長、85-88年外信部次長。89年産経新聞へ移り、以来ソウル支局長兼論説委員。92年度ボーン・上田記念国際記者賞受賞。著書は約30冊におよぶ。近著としては「ソウルが平壤になる!」(ビジネスク社)、「昭和天皇語録」(講談社学術文庫)、「韓国を食べる」(文春文庫)、「日韓新考」(扶桑社文庫)、「アジア裏メシ街道」(阪急コミュニケーションズ)など。韓国内で出版された著書としては「韓国人 あなたは何者か」(1983年韓国国内でベストセラー)など5冊。

山折哲雄さんの記念講演の後、午後5時30分  
から会員懇親会が開催され、出席者150人で黒田  
勝弘さん（産経）のクラブ賞受賞をお祝いしま  
した。



「ご苦労さまでした」——この日の総会で退任した北村正任前理事長（中央）と  
小林昂前副理事長（右）の労をねぎらう滝鼻理事長



左からクラブ賞推薦委員長の細野徳治さん、会報委員  
長の住田良能さん（産経）、共同の山口光さん



「よかったナー」共同時代の上司・佐藤信行さん（中央）  
は自分のことのように喜び祝いのワインもすすみました  
右は昨年度受賞の春名幹男さん（共同）



クラブ賞選考委員長、役員選出委員長を務め終えホッとした表情  
の島田昌幸前総務委員長（手前右）



産経の千野境子さん（右）と藤原房子さん（91  
年度の受賞者）

6、7 ページ左下の写真＝産経新聞提供

## 山折 哲雄 国際日本文化研究センター長

5・16(月) 総会記念講演会  
司会 滝鼻卓雄理事長 出席 197人

## ▼パクス・ヤポニカの可能性

宗教学、思想史が専門の山折さんは、日本人の宗教性、生命観の分野で現在、最も耳を傾けさせる人物だ。以下、極めて乱暴ながら、1時間の講演を要約すると――。

日本の歴史には、平安350年、江戸250年の2度、長期平和の時代があった。ヨーロッパにもインド、中国にもこれほどの長期平和はなかった。その平和の原理は、軍事力が支えたパクス・ロマーナやパクス・ブリタニカとは全く異なり、宗教が大きい役割を果たしていた。

平安時代には、仏教と神道がうまく習合、さらに、象徴天皇制では政治的権力と宗教的権威が両輪となつて国家が経営された。江戸の250年では、家康が制定した武家、公家、

寺家の三つの諸法度で、社会は3すくみの構造となり、江戸の武力、京都の文化・儀礼、氏神と菩提寺の神仏共存体制が社会を安定させた。

加えて「たたりと鎮め」が独自の文化だった。万葉や源氏物語、謡曲の世界の御霊、物の怪、亡霊は、僧侶の加持祈祷、祈りで鎮められ、かえって民衆の守護神となつていく。

国家と宗教が正常なバランス関係にあることの大切さが、日本の歴史の教訓である……。

「日本には平和の時代についての研究は皆無だった」「鎌倉時代は宗教改革の時代ではない」などの指摘も興味深かった。パクス・ヤポニカ、日本の平和力は、つまるところ、公家の非暴力の文化、たたりを鎮める祈りにあるというのが山折さんの考えのようだ。神仏分離を進め、一神教の都市を形成した明治政府の思想は、いわばその対極だった。

今、日本は、近隣国から罵倒され、敵視され、信頼も愛情も勝ち得ていない。この事態に日本文明はどう立ち向かうのか。考えさせられる。

個人会員(読売新聞出身)

森脇 逸男

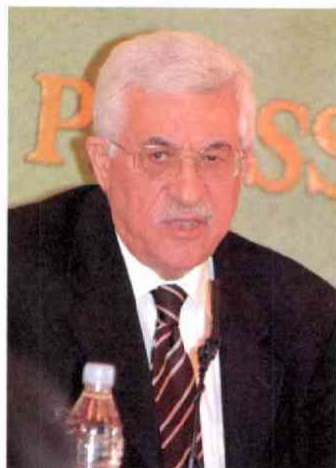
## マハムード・アッバス パレスチナ自治政府議長

5・17(火) 記者会見 中井康朗委  
員 通訳 アブタラモメ 16人

## ▼前議長と対照的な個性

アッバス氏の前任のアラファト議長(故人)とは何度か会見したが、穏やかに終わったためではない。愚問を発すると説教されるし、批判がましい質問には猛然と反論してくる。だが、アラファト氏の目はいつも笑っていた。来日したアッバス議長の見に出席して、前議長の茶日つ気たっぷりの叱声を思い出した。

アッバス議長は私のつたない質問にも淡々と実直に答えた。どこか愛嬌のあるアラファト氏とは違って秋霜烈日の雰囲気である。会見をアラビア語で通したのは、議長としての初来日で自分の意思を正確に伝えておきたいと思ったのだろう。2人の個性の差は、パレスチナ問題が大衆



運動から密室の政治交渉へと軸足を移している象徴のようにも思えた。

パレスチナ情勢は相変わらず厳しい。イスラエルとの交渉を軌道に乗せるのは容易ではなく、ハマスなどの原理主義組織にどう対処するかという問題もある。まさに内憂外患、難問山積の現状が今後、改善するどころか悪化する恐れもあるのだ。

議長が日本の政治的関与に期待したのは、状況安定への「重石」がほしいからだろう。小泉首相との会話では日本、イスラエル、パレスチナ の首脳会談を東京で開く構想も話し合われた。実現性はともかく「仲介は米国の役目」という既成概念を超えた、興味深い構想である。

パレスチナは、和平交渉の閉塞状況に何とか風穴を開けたい。日本としても、経済面だけでなく政治的に貢献したい気持ちがある。ともに平和を願う思いが「東京3首脳会談構想」として形をとったのだろう。近く来日するはずのシャロン・イスラエル首相の対応に注目したい。

毎日新聞論説委員 布施 広



吉富 勝 経済産業研究所長

5・18(水) 研究会「東アジア共同体」  
④ 司会 春名幹男委員 出席 71人

▼協調切り上げの枠組みづくり

「東アジア各国の(対米ドルでの)協調した通貨切り上げは、年末の第1回東アジア首脳会議(サミット)の議題にふさわしい」——東アジア共同体構想について説明するなかで、吉富氏は刺激的な問題提起をした。米国の財政再建でまず持続不能の米国の経常赤字が続くなら、米ドルは30%は切り下げなければならないというコンセンサスが、国際金融の専門家の間にはあると言う。

それを「東アジア全体で一斉に実施すれば、域内貿易の比率が55%と高いため、それぞれの国にとっては実質的には15%以下の通貨切り上げの痛みで済む。成長率の高いアジアなら吸収可能なレベルだ」というのが冒頭の提言の趣旨である。



米国からの通貨切り上げ圧力をアジア域内で協調して緩和しようという提案は、持ちかけ方を間違

えなければ、東アジア各国や米国から検討に値する提案と受け取られるだろう。特に、米国から為替調整圧力を集中的にかけられている中国にとってはありがたい提案となる可能性が高い。協調切り上げの枠組みづくりに成功すれば、通貨政策を通じてアジアの政治的な緊密度も高まる。アジア各国間の貿易拡大につながるという点でも、「東アジア共同体」に向けて東アジアサミットという舞台はかつての提案場所だと言ええる。

暴力的な反日デモや中国副首相の小泉首相との会談キャンセルで、中国への嫌悪感を持った日本人も少なくなかっただろうが、あらためて中国や韓国など近隣国との友好関係を築き直す必要性を痛感した人も多い。東アジア地域の経済関係を強固にして、地域の繁栄と平和、民主化を確実にしていこうという「東アジア共同体」構想のため、吉富氏は国際的な評議会メンバーとして数年にわたって地ならしを続けてきた。その活動と発言にあらためて重みを感じさせられた。

日本経済新聞経済部次長

土屋 直也

アブドラ・アブドラ アフガニスタン外相

5・19(木) 記者会見 司会 春名幹男委員 通訳 西村好美 出席 50人



▼民族融和の象徴としての役割

外相の経歴に目を通し驚いた。母親がタジク人なのはともかく、父親がパシトゥン人だったからだ。

旧政権タリバンは同国最大民族パシトゥン人が中心だったが、米軍とともにそれを崩壊させたのがタジク人主体の旧北部同盟で、アブドラ氏はその最高幹部。アブドラ氏はタジク人——はアフガニスタン報道の常識で、本人もそう答えてきた。

今なお復興途上のアフガンは多民族国家で、民族融和が復興のカギを握るとされる。

パシトゥン人だが軍に足場のないカルザイ大統領と、少数民族だが内戦を戦い抜き軍を押し上げたタジク人の対立構図は、融和の大切さや難

しさを語る上でよく取り上げられてきた。

もつともアフガンで実際に取材すると、多くの国民が複数民族の言語を理解し、パシトゥン人を優遇したタリバンが現れるまで自分の民族を気にしたことがないと話す人も多く、日本人が理解するほど事は単純でない気はする。

ただ、昨年の大統領選でタジク人の大統領候補にインクビューした際、何度民族名を尋ねても「アフガン人」と譲らなかつたことを振り返れば、民族間のあつれきが依然強いことの裏返しだと言えらる。

会見では、麻薬撲滅やイスラム教の聖典コーラン冒とくに関する米誌報道などに時間が割かれ、民族問題への言及はなかつた。

アフガンで両親いずれの民族が自らの民族になるかは知識がないが、主要2民族を両親に持つ外相が民族融合の面で欠かせない存在であることは言うまでもない。国際社会の支援も当面必要で、アフガンの顔としての役割がしばらく続きそうだ。

共同通信前カブール支局長

堀越 豊裕

## 寺田 輝介 前駐韓国大使

## ▼北朝鮮核問題の2層構造



アメリカのテレビ、新聞が「北朝鮮が核実験の準備加

速」と一斉に報じてからちょうど2週間後。クラブゲスト3度目の登板となった寺田氏が、最近の動きの真相をどう見立てるかに関心が集まった。前駐韓大使であるだけでなく、外務報道官、ペルー人質事件の前線担当大使を務めた寺田氏は、表に出る情報の背後を読み解く適任者だ。

この日の結論は「北朝鮮の核問題は、決して手放さない部分と取引に使う部分の2層構造として見る必要がある」という指摘だった。核実験の可能性についても、「偵察衛星に見せるための偽装の可能性がある。後ろ盾の中国が認めないのだから、核実験は外交的ジェスチャーの色彩が強い」と冷静に分析した。

北朝鮮にとっての交渉相手はアメ

5・20(金) 研究会「北朝鮮」④  
司会 重村智計委員 出席 107人

リカで、日本と韓国は援助を取り付ける相手という原則は変わっていない。その一方で、かつて旧ソビエトから原子力技術の指導を受けた時点で、こっそり核兵器の保有を進めていた疑いがある。そう展開した上で、寺田氏は「北朝鮮の核問題は、常に根っこから見ないといけない」と、飛び交う断片情報に耳目を奪われがちを傾向を戒めた。

ご本人は「政府を離れて公開情報の分析に専念しているだけ」と謙遜するが、内外の関連文献を丹念に読み込む誠実な姿勢が伝わってきた。思わず会場の出席者から「北朝鮮専門家といわれる人の中で、誰を信じたいのか教えてほしい」という質問が出たほどだ。

外務省を側面から支える(財)フォーリン・プレスセンター理事長という現職ゆえに、慎重な発言が求められるのかもしれない。しかし、次回に登場の際には、さらに踏み込んだ角度からの切り込みも試みていたきたい。

NHK解説委員

島田 敏男

## 武部 勤 自民党幹事長



## ▼したたかだったか

「相互信頼」。ためらうことなく揮毫した四文字が、いまの心境を映し出しているのだろう。それが、国際政治の場で通用するのかどうか。

会見は、武部氏にとって、間の悪いタイミングだったに違いない。

郵政民営化法案の衆院本会議入りをめぐる、与野党がならみ合いを続けている真っ最中だった。加えて、小泉純一郎首相の靖国神社参拝に関する自らの発言をいかに説明するか、が求められていた。内容によっては、いずれも新たな波紋を広げかねないだけに慎重に言葉を選んでいった。こんなピンチをいかにしのぐかに器量が見えてくるのではあるが。

民営化法案の仕上げ方は「国会で議論する前にどういう決着にするか

5・25(水) 記者会見 司会  
影山日出夫委員 出席 17人

は申しあげるべきではない」だった。「うまくいくと思う」と付け加えたあたりは、希望的観測なのか、反対派説得の自信なのか。

関心はやはり、首相の靖国参拝への中国の批判に対し、武部氏が「内政干渉」と反論・撤回したのかどうか、だった。これには「国民の間に内政干渉という声があることを紹介しただけ。内政干渉とは言っていない」としたうえで、「靖国参拝への中国の発言は内政干渉と思っていない」と言い切った。それならなぜ、「内政干渉」を提起したのだろうか。撤回がもつ意味は大きい。

武部氏は日中関係について「不信より信頼、誤解より理解で臨みたい」とも述べた。これが「相互信頼」につながっているのだろうか、強大な隣人になった中国との付き合いには「友好」だけでは律し切れない、より複雑かつ根本的な利害の不一致が生起している。すべての利害損得を考え、国益のために毅然とした姿勢をとる。そんなしたたかな外交の必要性を痛感した会見であった。

産経新聞論説副委員長

中静 敬一郎

保坂 修司 日本エネルギー経済研究所研究主幹

5・25(水) 研究会「中東・パシフィック」  
 55人  
 55人  
 55人



▼サウジ地方選挙に見る新しい波

保坂氏はサウジアラビア定点観測者の数少ないひとりである。今春行われた地方選挙も現地調査を行った。その保坂氏は「いつもサウジは大丈夫かと聞かれる」と苦笑する。

サウジアラビアにとって、唯一の脅威は宗教勢力だが、70年代、石油収入の増大とともに地位向上を果たすテクノクラートとのバランスをとるため、政府は「ウラマー」(宗教指導層)を国家公務員とし、ワッハブ派宗家(シェイク家)を教育行政の責任者に当てた。宗教勢力を体制内に取り込むことで、王家は過去、幾度かの危機を乗り切った。

しかし、独特の宗教教育を受けた若者たちは、アフガンでの対ソ連戦で勝利感を味わい、帰国後はサウジ駐留米軍に矛先を転じた。その米軍

が撤退して、刃が王家に向かおうとしたとき、イラク戦争が起きた。

保坂氏によると、現代サウジの社会構造は、60%の「アバシー(ノンポリ)層」を挟んで、右に「リベラル」、左に「宗教保守派」がそれぞれ20%ずつ控え、後者の右翼が「穏健派」、最左翼が「テロリスト」。そして「リベラル」を構成するテクノクラートやビジネスマンと、「宗教穏健派」が「サフワ(覚醒者)」と呼ばれるサウジ改革運動の担い手。この「サフワ」が21世紀サウジのキーワードだと指摘する。

私はサウジを部族の縦糸と、イスラームの横糸で織られる布にたとえるが、地方選挙を実見した氏は、地方区では部族でも、イスラーム主義でもない階層が善戦したという。地方の新たな波が都市部の「サフワ」に合流するとうなるだろう。

最後に「日本の主要な原油供給国であるサウジアラビア情報が欧米経由であるのは、メディアの怠慢」という氏の一言は痛かった。

「季刊アラブ」編集委員 個人会員 (中日新聞出身) 最首 公司

リレーエッセー

オウム・サリン事件④

オウム真理教「教祖」松本智津夫被告に一番で死刑判決が言い渡されたとき、メディアはまた、この教団について「神話」を語るだけで終わってしまったと思った。一人の「極悪人」がいて、慕ってくる弟子たちを思いのまま操って、みんなに不幸をばらまいた、という物語である。

社会そのものを標的にして、教団が無差別殺人テロ事件にまで突き進んだのはなぜか。かわった被告信徒たちの多くが裁判で口をそろえたのは、恐ろしいことが起こることはわかってはいたが、「教祖」は絶対であり、その指示に逆らうことはできなかったという主張だった。中には、自分たちは「教祖」に心をコントロールされてきた、と語る信徒もいた。

■メディアはまた「神話」を作った

「教祖」はまるで、全能を備えた魔法使いみだった。

しかし、実際はどうだったろうか。オウム裁判のほぼ全公判を、あしか



け10年間傍聴し続け、教団の特質をつぶさに見てきて思うのは、次第に「軍事集

■降幡 賢一

団一に育っていったこの教団を支えていた青年たちの悲しさである。気になるのは、「教祖」を神とあがめ、その前にひざまずいた人々の組織はどんなものだったか、ということだった。階級制と身分制で固められた教団では、部下は上司の指示に絶対服従をした。思考を停止し、自立を放棄し、互いの行動を監視し合うことが奨励された閉塞社会は、まるで戦時中の軍国主義国家のようだった。そうして彼らは、腐敗した社会を壊滅させることが本当の救済につながる、という強い使命感を持って行動していたのだ。

私はいつも一本の蚊柱にそれをととえるが、この世の救済者と思いが上がった「教祖」と取り巻いたちは、互いに互いを刺激し合い、興奮を高め合ううちに、自分たち自身をも制御できなくなって暴走してしまっただけだ。

すると同じようなことが、私たちの周辺にもあることが分かった。オウムはまさしく私たちのこの社会の中から生まれた。その意味でこれは「彼ら」の問題ではなく「私たち」の問題なのだ。なのにメディアは今も、「神話」を語るだけで、そのことを忘れさせている。(元朝日新聞編集委員)

# エチオピア革命異聞

—情報源は信頼できたか—

宝利 尚一



かったからだ。エリトリア出身で穏健派のアマン・アンドム將軍（軍事評議会議長）が処刑されたことは、急進改革派が社会主義体制の確立を目指していることを示唆していた。私はマンゲスト（メンギスツ）・ハイレ・マリヤム少佐の「実像」に迫ろうと努めた。アジスアベバで「マンゲスト少佐の友人と少佐の父親（夜警をしていた）」から話を聞いた。少佐が軍事評議会第1副議長であることを知った。

エチオピアの首都、アジスアベバから北へ約650キロ、エリトリア州の州都、アスマラ（現在のエリトリア国の首都）はヤシの並木が続く美しい街だった。アラブのにおいと、イタリヤ植民地時代の西洋館の明るい色が奇妙に調和していた。31年前の1974年3月初めのことだった。

3千年の歴史を誇るアフリカ最古の独立国、エチオピア帝国を治めていたハイレ・セラシエ皇帝が廃位される6カ月前だった。アスマラ駐屯のエチオピア陸軍第2師団が1974年2月26日、兵士の給与大幅引き上げを要求して皇帝に反乱を起こした事件を取材するため、空港再開と同時にアスマラに飛んだ。

当時、私はカイ口特派員だった。

第4次中東戦争とその戦後処理がひと段落したころ、エチオピア帝国で「革命」が進行しつつあった。その年の3月から12月にかけて、計4回、41日間、エチオピアに出張し、各地を取材した。アスマラでは、第2師団の将校に話を聞いたり、エチオピアからの分離独立闘争を続けていた「エリトリア解放戦線（ELF）」に近い筋」とも接触した。

7月の出張では、2月の軍部の反乱以降、アジスアベバで「静かなクーデター」が進行していたのを肌で感じた。首都で改革派の「軍事委員会正式メンバーの1人（大尉）」と単独会見し、同委員会の議長が第3師団出身の急進改革派、マンゲスト少佐（その後メンギスツと表記された）であることを聞き出した。そして9月12日、「諸王の中の王」

「ユダのライオン」と称されたセラシエ皇帝は廃位させられた。治世44年、82歳の皇帝、最後の日だった。日本でも親しみをもたれていたセラシエ皇帝は、近代エチオピアの基礎づくりに努め、アジスアベバに本部を置くアフリカ統一機構（OAU）現在のアフリカ連合）の創設に指導的な役割を果たした。しかし、帝国内の荒廃と若手将校の急進的な改革に、年老いた皇帝はついていけなかった。

エチオピアの軍事評議会（7月の軍事委員会を改称）は11月下旬になって、皇室の腐敗に関係した前皇帝の近親者、高官のほか、軍事政権の穏健派指導者ら計61人を処刑した。その直後、私はエチオピアへ4回目出張をした。皇帝を廃位に追い込んだ急進派指導者が誰かを確かめた

私の原稿は12月8日付け国際面（当時は外報面）に掲載された。「少佐はエチオピア南部カフファ州クロコンタ地区の貧しい家庭の出身で、今年32歳。：ホレタの軍事学校を中尉で卒業、アジスアベバの陸軍部隊、アスマラの第2師団で大尉に昇進、その後ハラレの第3師団に配属され、米英両国にも留学した」と書いた。そして「独裁的傾向」をみせたというアマン將軍を解任直後処刑したのも、マンゲスト少佐の「変革か死か」という考え方に近いもの：」などと続けた。

私は日本のメディアでただ1人、少佐の経歴の一部を解明したと自信を強めた。アジスアベバから東京に

原稿を送った後、エチオピア・テレビの記者、カメラマンらと9日間かけた南部飢餓地帯取材の旅に出た。

カイロに帰任した私は、ライバル紙の朝日新聞を見て驚いた。朝日新聞も私と同じ12月8日付け国際面でメンギスツ少佐の出自を詳しく伝えていた。筆者は私の友人で、エチオピアでも同時期に取材していたカイロ支局長の鴨志田恵一特派員だった。見出しは次のようだった。

「エチオピア革命 ナゾの指導者 最下層出身メンギスツ少佐? 差別に配慮、名秘す 怒りの果ての大量処刑」

私の原稿の見出しは次のようだった。

「エチオピア 影の実力者 マングスト・マリラム少佐 『変革か死か』の行動派 32歳、同志数人と評議会牛耳る」

両紙の見出しを見ると、同一人物とは思えない。朝日新聞の情報源は「少佐の友人で、アジスアベバ駐在の外国情報機関に勤める40代のエチオピア民間人」だという。少佐は「42歳で2男2女の父」「エチオピアの主要民族アムハラ族の最下層シヨウワ階級の出身で、父親はドアボーイだった」「エリート軍人のアマン將軍は露骨に（下層部族出身の少佐

らに）差別と嫌悪をみせたのではないか」（「処刑は）政治的姿勢の差ではなく、怒りが流血の事態を招いた」としている。

両紙を併読している読者は混乱しただろう。私は、日本から遠く離れたエチオピア革命のほんの一部でも読者に伝えようと努めていたが、自信がなくなっていた。

年が明けた1975年1月末のころだったと思う。NHKカイロ支局の平山健太郎支局長から電話があった。前年秋、平山特派員もエチオピアに出張していた。「文春の2月号が届いた。読売、朝日のメンギスツ像についての批評が載っているよ」

平山特派員から月刊文芸春秋1975年2月号を借りて読んだ。当時文春には「新聞エンマ帖 報道に物申す」という4ページのコラムがあった。国内記事4本の批評の他に、エチオピアに関する批評が1本あった。

「新聞エンマ帖」は、朝日、読売の描くメンギスツ像が違いすぎる、アマン將軍の処刑も「怒りの果ての処刑」なのか、「大義にもとづく使命感」によるものなのか、分からないと批判していた。「大げさに言え

ば、エチオピア革命の評価にも微妙な影響を与えるのではないか」「記者の独断や憶測をまじえた眼で革命の裏面をのぞき見ることだけはつしんでほしいものだ」と指摘された。

「記者の独断や憶測」はなかったと今も信じている。しかし、「情報源」の情報の信憑性、信頼性については、もう少し丁寧にチェックすべきだったかもしれない。私のアスマラの情報源は「ELFに近い筋」で「アジスアベバ大学を卒業、現在アスマラに住む若い消息筋」だった。たった一つの情報源をもとに記事にするにはリスクが大きい。

メンギスツ少佐についても「友人と父親」から数回話を聞いたが、別の情報源にも確認すべきだった、と反省している。

海外特派員は、赴任地で日本人記者が少ない場合、出張などで「つるんで」取材することがある。だが、私と鴨志田特派員はエチオピアで風邪薬を融通したことはあったが、常に独自取材を心がけた。独自の情報源に接触し、革命の指導者像をつかもうとした。結果は、かなり異なる人物像になってしまった。

ロンドンで発行された1982—83年版国際人名録によると、メンギスツ少佐は1937年生まれ（革

命当時37歳）、ホレタ陸軍士官学校卒、第3師団配属、セラシエ皇帝廢位に重要な役割を果たし、1977年国家元首、中佐などと書かれていた。共同通信社の1986年版世界年鑑でも1937年南部生まれ、下層多数部族オモロ族出身、陸軍士官学校卒、臨時軍事評議会第1副議長を経て、1977年臨時軍事評議会議長（国家元首）などとなっていた。

「南部の下層部族出身」は一致するが、年齢は日英の人名録でいずれも「37歳」となっていた。朝日、読売とも年齢が間違っていた。ジャーナリストは常に信頼できる複数の情報源を探して正確さに努めなければならぬことを実感した。

わずかな救いは「新聞エンマ帖」が「これだけの記事をまとめあげた努力については相応の敬意を払いたいが」と書いていたことだった。

ほうり・しょういち 1939年東京生まれ 63年読売新聞社入社 外報部 経済部 解説部 72年カイロ特派員（3年） 80年パリ支局長（4年半） 86年アメリカ総局長（約3年） 89年論説委員 2000年北海道大学人文学部教授 01年北海道大学大学院国際広報メディア研究科客員教授 著書に「日本の中東外交」（教育社） 仏訳「大統領ミッテラン」（読売新聞社） など



## 福知山線脱線事故

▼ 渋谷 卓司  
(毎日新聞社)

## 遺族と向き合う 息の長い取材

した。「あくまで匿名希望」という遺族もいたが、中には「実名報道はやむを得ないが顔写真掲載はしない」という遺族や、「犠牲になった家族の記録をきちんと残したほうがいい」と取材に協力してくれるようになった遺族もいた。

### ■「肉声」と「追跡」取材

遺族の中には赤裸々な思いを伝えたい人もいた。新聞に信頼を寄せている遺族が語る貴重な肉声を記録した企画「生きる」。記者の聞き取りによる「遺族の手記」ともいえる。

独白形式で、生の言葉、ニュアンスを忠実に再現し、沈黙や逡巡も表現した。

妻を亡くした夫(57)。集団就職で熊本から関西に来た妻への思いを語った。事故で二男を亡くした父親(68)は、昨春には長男をがんで亡くした。両親より先に逝った子どもたちへの思いがあった。悲惨な体験、苦しみの中で、なお歯を食いしばって「生きる」遺族の思い、遺族に寄り添う記者の思いを込めた。

もう一つの柱は、現場発のそれぞれの事象の詳細を描く「追跡」シリーズだった。遺体安置所で何が起きていたか、生存者発見から救出までの闘い、事故を日撃した人々の証言

などを追いかけた。こうして事実を積み上げることで、事故の総体を描こうという狙いだった。その取り組みは約1カ月続けた。

遺族や負傷者との補償交渉、電車が衝突したマンション住民の今後、航空・鉄道事故調査委員会の調査と兵庫県警の捜査の行方、JR西日本の企業風土の改善……。多くの課題が山積している。遺族の方々と向き合えばならない。

### ■再び現場へ

直線からR300(曲線半径300m)内の事故現場まで約250m。鉄路は赤さびていた。

遅れを取り戻す「回復運転」、できなければ懲罰のような「日勤教育」。電車は相当なスピードで走ってきたはずだ。車体が左に大きく傾き、電柱に接触。瞬間空を飛んだ。先頭車両はマンション1階駐車場の空間に飛び込み、2両目はアルミ缶を握りつぶしたようにひしゃげた。

マンションは、犠牲者たちの「墓標」のようにみえた。

しぶや・たかし 1986年入社 大阪本社社会部 同代表室委員などをを経て04年から社会部副部長

兵庫県尼崎市のJR福知山線で4月25日に発生した快速電車(7両)脱線事故。発生以来、犠牲者の数は日ごとに膨らみ、終夜の取材態勢が続いた。29日朝刊でようやく「死者106人、救出終了」と確定したが、死者はその後107人に、負傷者は549人にのぼった。

### ■匿名希望への対応

近年、例を見ない多数に上った犠牲者。遺族取材、犠牲者の顔写真取材には大阪本社のみならず、全国の応援記者を投入した。

入学式、半袖、山歩き、成人式。

四季の中で見せる犠牲者たちの顔写真の笑顔を見つめると、その人が生きてきた人生そのものが想像できた。記者たちが遺族や関係者から提供を受けて取材してきた一枚一枚の顔写真はまさしく、犠牲者たちの「生きた証し」だった。人は決して名前のない「A」や「B」でない。

記事化した後、犠牲者名簿を発表した兵庫県警やJR西日本を通じ、遺族から「匿名希望」などが報道各社に伝えられる事例が相次いだ。

これらの遺族とは記者が直接面談

千葉ロッテ・マリーンズ

# ファンと一体 ボールパークの街へ

▶馬場 秀幸  
(千葉日报社)

「10年ぶり貯金10」「20年ぶり10連勝」「45年ぶり11連勝」。プロ野球パ・リーグの首位をひた走る千葉ロッテ・マリーンズ。紙面に「何年ぶり」の見出しが躍る。データもニュースの主要部分を占めるスポーツ記事。そういう意味でも日々、数字に追われている。

新規参入の東北楽天ゴールデンイーグルスを除いて、残りの11球団で一番優勝から遠ざかっているのが千葉ロッテだ。本拠地を千葉市に移し

て14年目。1995年の2位を最後に10年連続Bクラスに低迷していた地元球団の快進撃に本紙も連日、運動面で大きく取り上げている。「今年こそは……」と、県民も待ち続けた優勝へ期待を膨らませる。

快進撃はあの日から始まった。

3月28日、パ・リーグ開幕第2戦。前日(27日)、9年ぶりの本拠地開幕を白星で飾れず、新球団、楽天に歴史的1勝を献上した悔しさを吹き飛ばすには十分すぎる「球団新記録の1試合26得点」。スポーツ紙とは体裁の違う紙面展開をする本紙でも26対0のスコアボードの写真はもろろん、同一面に6枚もの関連写真を載せた。

楽天を歓迎した開幕戦の華々しいセレモニーも破格の扱いだった。社会部の若手記者も応援に駆けつけ、お祭り騒ぎのプロ野球の幕開けを一面、社会面、運動面のいずれもトップで報じ、写真グラフィのおまけまでついた。スーツ姿で現場を走り回る事件記者も開場前から並ぶファンを精神的に取材した。

ボールパーク。ベースボール発祥の国、アメリカでは野球場をそう呼



いまやスタジアム全体がファンとの交流の場となっている。記念撮影するバレンタイン監督(5.10)

ぶという。千葉ロッテの本拠地、千葉マリンスタージアムへの最寄り駅、JR海浜幕張駅の改札を抜け、球場までのメイン通りを歩くと球団キャラクターのモニュメント、フラッグなどが目に飛び込んでくる。球場周辺の街全体が「マリーンズのまち」の印象を受ける。

ファンと一体となったチームづくり。球団とバレンタイン監督が目指す夢のボールパーク化計画。今や12球団一のファンと称されるサポーターの、その熱狂的な応援は、交流戦

の際、セ・リーグの選手たちもうらやましそうに見つめたほど。プロ野球改革元年がうたわれる今年、球団は各分野でのプロフェッショナルをフロントに招へいするなど、米大リーグのメジャーならぬ「マイナー」流「地域密着型球団」への変ぼうに向けて動き出した。選手とファンの垣根をなくそうとさまざまなアイデアで球場に足を運ぶファンを喜ばせている。ファンはシーズン後、優勝の美酒という最高のプレゼントに酔いしれたいと願っている。本紙も「31年ぶり優勝」の大見出しで締められれば、これほどうれしいことはない。

ばば・ひでゆき 1998年入社 現在 運動部

## 千葉市メモ

人口 92万729人(5月1日現在)  
世帯 37万7931世帯(同)  
面積 272.08平方キロメートル

1992年4月、宮城県仙台市に次ぐ全国で12番目、関東では横浜市、川崎市に次ぐ3番目の政令指定都市に。スタジアム周辺には、東京モーターショー(今年は10月22日-11月6日に開催)などを行う日本最大級のイベント会場の幕張メッセや、約370社が集積する日本有数の業務地区、幕張ベイタウンなどがある。スタジアムの前には約1.8キロの人口海浜、幕張の浜が広がる。

千葉市はそのほかスポーツでは、サッカーJ1のジェフユナイテッド市原・千葉を持つ。

## 情報発信

## ■第22回庭野平和賞贈呈式

ことしの庭野平和賞がドイツのカトリック神学者ハンス・キュング博士に贈られた。同賞は宗教活動を通じて世界平和の構築・推進に顕著な功績をあげた人（団体）を表彰するもの。キュング博士は1993年に米国で開催された万国宗教学会議で採択された「地球倫理宣言」の起草者で、現在はドイツの「地球倫理財団」会長として諸宗教の相互理解や対話協力、地球倫理の普及に活躍している。庭野日鑑総裁から正賞の賞状と副賞として賞金2000万円および顕彰メダルが贈られた後、キュング博士の記念講演も行われた。（5. 11 10階ホール）

照会先：庭野平和財団 Tel 03-3226-4371

## ■徳島クラブ 日系人パラグアイ大使が講演



「徳島クラブ」の第100回例会が開かれ、同県三野町出身の駐日パラグアイ大使・田岡功大使（61）＝写真・徳島新聞提供＝が「移住－外国から見た日本」のテーマで講演した。

田岡大使は1958年家族とパラグアイに移住した日系1世で、昨年9月、日系パラグアイ人として初の駐日大使に就任した。大使は「日本の若者が引き起こす事件をみると日本の将来はどうなるのかと思う。日本のありがたみを知らない若者が南米に来て日本のよさを知ってもらえるような交流の場面をつくれまいだろうか」と語った。

徳島クラブは首都圏で活躍している同県出身者と関係者の集まりで会員数は約100人。年1回の総会と4回の例会を開催し、県ゆかりの講師を招き話を聴いている。会員相互の親睦と情報交換の場として定着し、毎回40～50人が参加している。

（5. 18 10階ホール）

## ■チンギス・ハーン建国800周年記念事業の発表

来年2006年はチンギス・ハーンがモンゴル帝国を建国してから800年にあたる。モンゴル政府はそれを記念して様々なイベントを予定している。



最大の売り物が1000人による騎馬軍団再現イベント。その記者発表会が行われ、モンゴルのバドボルド産業・通商大臣、シーレグタンバ同副大臣、バドジャール駐日大使が出席した。

モンゴル政府によって記念事業実行委員会が設立され、その実行委員会には日本の有志企業が結成する「チンギス・ハーン建国800周年記念事業フォーラム」が協力する。その顧問となった作家の堺屋太一氏は「モンゴルがアジアの観光国のひとつに発展することに貢献したい」と期待と抱負を語った。13世紀のモンゴル人の衣装と武器、そして技術などを再現し、草原を疾走する壮大な歴史イベントにする予定だ。（5. 26 10階ホール）

## 新しいOB会員

## マイBOOK マイPR

『蒼穹への道 ヒマラヤン・ブルー』  
バン・ジロー

石川 和伴（個人会員 北海道新聞出身）

ヒマラヤ・トレッキングの本です。どこからでも好きなところから読んでみてください。

文章と写真を見開きで一体化させた新しいタイプのエッセー・フォトです。プロの写真家ではありませんが、文章はそれぞれ書く人の思いが濃縮されず。その文章にふさわしい写真が1枚ずつあれば、言葉の行間をさらに強化してくれると思います。

「文写一体化」したエッセーができれば、明解な臨場感を味わってもらえれば幸いです。

（アジア通信・2500円）

▼HP 蒼穹への道 ヒマラヤン・ブルー

URL: <http://www.geocities.jp/himalayanblue21/>

## ◇将棋の会◇ 5月14日（土）

安食総子女流初段との指導対局に5人が挑戦。下記の3人がそれぞれ3時間を超える熱戦をものにしました。  
平手：白木東洋氏 安原幸雄氏 二枚落ち：日比野和幸氏

## ○囲碁の会● 5月28日（土）

例会には20人が参加。調子の良し悪しが比較的はっきり出た日でした。宮沢昭二郎、荒井忠男、友田錫、相川誠一、三ッ野充蔵の5氏が全勝。他に日比野和幸、吉川真澄の両氏も好成績でした。一方、5氏が白星ナシ。さて次回（6月25日）は恒例の夏季大会です。成績の良かった方はそのままの調子で、それ以外の方は心機一転、健闘を祈ります。



## バー、レストラン、宴会

予約電話 和食3503-2723 洋食3503-2766

吉  
富  
カクテル

### 6月は真珠 <コクテルチキータ>

6月は結婚、家族の守護女神ジュノーに捧げるということからJUNEになりました。誕生石は健康と長寿・富の象徴とされる真珠です。チキータ、グレープフルーツジュースなどでアレンジしました。



和  
食

### 鯉懐石コース (7月1日まで)

先付：鯉、じゅんさい お椀：鯉くず打ち、小メロン 生もの：鯉湯びきほか2点 焼き物：鯉南部焼き 冷やし煮物：鯉紀州漬け、小茄子、冬瓜揚げ物：鯉グリーンアスパラ巻揚げ 食事：鯉御飯 甘味：アイスクリーム これに冷酒がついて5250円です。

洋  
食

### 初夏恒例 千倉産アワビのステーキコース (8月5日まで)

前菜：真鯛のカルパッチョ スープ：冷製クリームポテトスープ メーン：千倉産アワビのステーキ ハーブソースと夏トマト デザート：季節のフルーツのゼリーとバニラアイスの盛り合わせ これにグラスワイン、パン、コーヒーがついて6300円です。

歓  
送  
迎  
会  
プ  
ラン

### お手軽な宴会プランがおすすめ (7月1日～9月2日)

夏の異動期に合わせて割安なパーティープランのメニューを一新しました。社内はもちろんのこと同級会などのプライベートな会合にもご利用ください。

おひとり3500円でメニューは下記のように盛りだくさんです。飲み物と部屋代は別料金ですが、1500円をプラスしてフリードリンク(2時間)にすることもできます。また、お酒の持ち込みは無料です。10人からお受けします。予約は3503-2724の貸室担当まで。

メニューはマグロのステーキ胡麻風味サラダ、黒豚コース肉の冷シャブ風など冷製5品、夏野菜とトマトのチーズグラタン、地鶏もも肉のハーブとにんにくのピリ辛焼きなど温製5品。これににぎり寿司とそばがつかます。

## クラブの電話 ダイヤルイン

和食レストラン (9階)	クラブ行事への申し込み
3503-2723	3503-2722
洋食レストラン (10階)	会員事務
3503-2766	3503-2725
貸室予約、宴会打ち合わせ	経 理
3503-2724	3503-2728
受 付	会見申し込みアドレス
3503-2721	kaiken@jnpc.or.jp

## 会報委員会

委員長=住田良能  
委員=永井多恵子 中園龍二 橋場義之  
福沢亜夫 布施優子 仙石伸也  
連絡=長谷川和子 本庄五月  
(電話 03-3503-2752 FAX 03-3503-7271)

## ホームページを立ちあげます

9月をめどにクラブのホームページを立ちあげます。目下、準備作業をすすめています。当面は主に、次の2点に重点を置きます。

①『資料コーナー』をつくり充実している研究会の内容をデータベース化し、持ち場を離れられないため出席が難しい一線記者や地方会員の参考に供します。鄧小平や昭和天皇の会見といった歴史的なものもこれに加えるほか、会報既載の「クラブゲスト」や「ゲスト年表」もこのコーナーに入れる予定です。

②クラブの概要を紹介する英語バージョンをつくり、事務局が直接、海外のニュースソースと折衝するときの補助材料にします。

なお、会報に掲載した「書いた話 書かなかった話」「ワーキングプレス」「地方発」「リレーエッセー」「試写会」なども『談話室』のようなコーナーをつくり紹介したいと考えていますので、ご協力願います。

## <訃報>

松岡新児会員 (NHK出身、74歳) が4月18日大腸がんのため、後藤文康会員 (朝日出身、77歳) が同19日肝臓がんのため、古野雅美会員 (共同出身、72歳) が5月25日肺炎のため死去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。

## <会員現況>

法人会員 147社 基本会員 807人  
個人会員 1,655人 法人・個人賛助会員 74社 182人  
特別賛助会員 71人 名誉・功労会員 10人  
計 221社 2,725人

## 今後の行事予定 (6/3現在)

- 6. 17 (金) 15:00~16:30 (10階ホール)  
シリーズ研究会「中東ベシック⑥ 欧州と中東」  
内藤正典一橋大学大学院教授
- 6. 20 (月) 12:30~14:00 (10階ホール)  
北城恪太郎経済同友会代表幹事昼食会
- 6. 22 (水) 15:00~16:30 (10階ホール)  
ツアー・ハーティネシ・フィンランド教育  
相記者会見
- 7. 5 (火) 15:00~16:30 (宴会場)  
シリーズ研究会「中国経済①」  
呉軍華日本総合研究所上海事務所長
- 7. 11 (月) 15:00~16:30 (10階ホール)  
シリーズ研究会「中国経済②」  
服部健治愛知大学教授
- 7. 15 (金) 15:00~16:30 (10階ホール)  
シリーズ研究会「東アジア共同体⑤」  
岡崎久彦元駐タイ大使
- 7. 20 (水) 15:00~16:30 (10階ホール)  
シリーズ研究会「中国経済③」  
渡辺博史財務官
- 7. 29 (金) 14:30~16:00 (10階ホール)  
北尾吉孝ソフトバンク・インベストメント社  
長記者会見

行事案内専用電話 3503-3764

日時の変更なども含め、最新のクラブ行事をテープでお知らせしています。

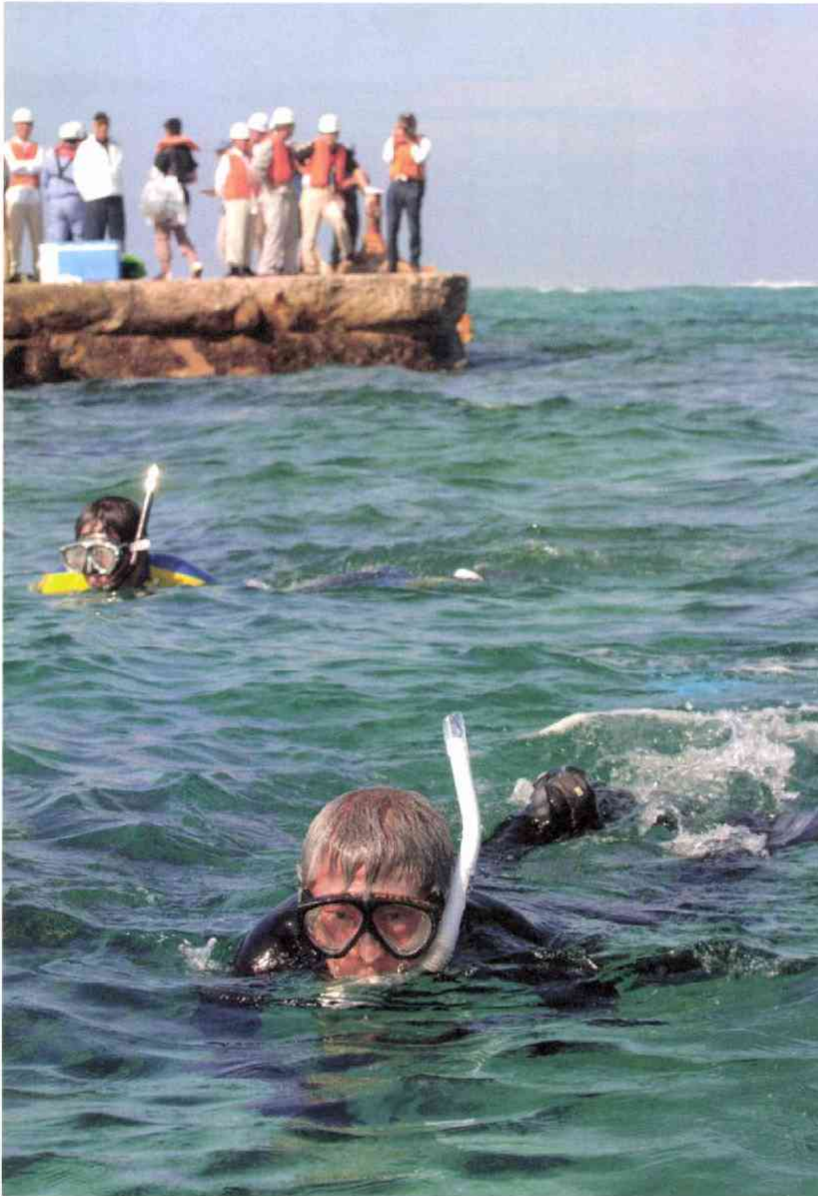
# 写真回廊

撮影

米田

堅持

(毎日新聞東京  
本社写真部)



東京都小笠原村の沖ノ島島Ⅱ 5・20

## 遊泳術 慎太郎式

日本の最北は北海道（択捉島が北海道に入るとして）、最西は沖縄県（与那国島）。最東はとくと、千葉県じゃなくて東京都（南鳥島）です。では、最南は？ これも東京都なんです。小笠原村沖ノ鳥島。これってテレビの「トリビアの泉」なら55ヘエくらいにはなりませんか。

5月20日、石原慎太郎東京都知事がこの島に出かけてひと泳ぎしました。沖ノ鳥島が中国のいう岩ではなくて、れっきとした島だとアピールするねらいからです。島ならば周囲200海里を国連海洋法条約で定めた「排他的経済水域」として、漁業や海底の資源を日本が確保できますから。

東京都が補助金まで出して島周辺での漁業を奨励したり、深海と海面との海水の温度差を利用する発電技術を使った灯台建設に関心を示しているのも、経済活動の実績をつくるためなんです。

そうはいつでも沖ノ鳥島は、山田吉彦氏の『日本の国境』（新潮新書）だと1930年に6つあった小島が、波浪に浸食されて今は2つだけになりました。

折から都政は、副知事らの辞職問題で大荒れです。都政の荒海を上手に泳ぎきるには、太平洋で泳ぐより難しいかもしれませんね。

(塚田 博康)